せんだい寸景

NO８　2005年1月
発行：じっかい電脳事務局

恩師の背中　茶畑学校

宇野量介先生は突然県教育長の職を辞され周囲を驚かせた。就任わずか１年まだ55才、定年は先のことであった。ながく知られていなかった真相はずいぶんあとになってご本人の口から語られた。

先生が第13代一高校長に就任されたのは昭和30年7月4日、このとき先生45歳。以後県教育長に転じるまでの9年間、校舎新築などおおくの事業を成し遂げられた。赴任の年はわれわれ「じっかい」生が入学した年でもある。91歳の生涯を閉じられたのは平成12年8月23日であるからわれわれはじつに46年の永きにわたり折につけ教えをたまわったことになる。同年秋じっかいの手で「しのぶ会」が開かれそれぞれに別れをつげたこととおもう。いずれ追悼集も編まれることだろうから、ここではひとつだけ、先生のお人柄を物語る話を紹介しておく。冒頭の一件である。

大運動会の宇野校長　「ドッチボール」でおたわむれ

戦後の財政難の時期県教委で課長職にあった先生は多くの教職員整理を余儀なくされた。そのとき「自分も時至れば責任をー」と思い極めておられた。突然とみえた辞任、じつは「あのとき」の覚悟を15年ののちに果たしたことになる。そんなことで責任とられてはほかの幹部はどうする。強い留意を振り切っての辞職に県幹部は激怒して「懲戒」的待遇で(相当な退職金減額)報いたとか。この話を明かしたさい「だから自分は(それを)ばねにそのごの研究に励んだよ」穏やかに話された。じっかいが先生の研究の成果である「犬棒録」などの発行人を買ってで販売にはしりまわったのはそんな先生の「背中」をみていたればこそ、当然のなりゆきであった。

ロードレースの日　選手の帰りを待つセンセイ方

鹿児島県西部、東シナ海洗う大隈半島先端を長崎鼻という。日本で夏をすごしたサシバが越冬のため南に渡るさい、この地に集結し群れをなして洋上に消えるのだそうな。先生のファイナルプランではこの長崎鼻上空からサシバの群れを追うようにセスナ機で南をさして飛ぶ。やがて燃料の切れた機は・・。

平成８年夏78歳になった小牧美夫先生に半日お付き合いした。自分で改造したキャンピングカーで日本一周中立ち寄られた(三度目の周回だとのこと)そのさいおっしゃるに「これからね、セスナの操縦練習しようかと思ってネ」えッ！どうして？その答えの要旨が冒頭の如きであった。

目の輝き、肌のつや、立ち居ふるまい、いずれも60歳そこそこといって疑いのないものだった。先生が鹿児島で生まれ、長崎で少年期を過ごし東北大進学で初めて仙台の人となり理学部助手から海軍に召集され敗戦で帰ったら大学に席はなく、口凌ぎに二女高の教師、さらに一高へ。みな初めて聞く話ばかりだった。思い出してくれたろうか物理担当教師小牧美夫さんのこと。一高教官から日産自動車に転職、終始研究畑を歩き、さらに日本自動車研究所で研究開発をなされた、などなど長い話をうかがった。

歌うセンセイ(左から平野・庄司定克・???一高祭にて)

先生は晩年を中央アルプス北麓長野県南箕輪町の農家をかりての独り住まい。手づくりの真空管プレーヤーでLPを聴きゴルフ、スキーを楽しむといった生活を送られた。夏の再会から2年後の６月、突然倒れ80年の生涯を終えられた。サシバの群れを追う夢はかなわなかった。あのころの一高で小牧先生が特段変わり者ということはなく先生方はいずれもなにかしら生徒たちに「感じ」させるものを皆みなおもちだったなあ、と思う。(一高在任S26・4・1~38・3・31)

新長馨先生は英語の先生だった。じっかい担任ではないからーと忘れていた。平成15年6月のこと遠来の9回生に頼まれ宮城野区栄の自宅まで同道するはめになった。逝去して七年、いちども組担任の霊前に参じてないからと訪問者はいう。外で待つつもりが招じられるままに仏壇前に座った。高校で教えたのは一高の10年間だけでのち宮城教育大学教授を長くつとめ宮城女学院大学に転じほどなく、白血病にたおれ1年ののち逝去された、６５歳。

すぐ帰るはずーが長くなった。夫人と9回生の会話をかたわらで聞く、だけなのだが胸に突き刺さるのだった。この七年、訪れる一高の教え子はまれ、否、なかったーらしい。焼香したらすぐ辞去のはずが、そうはいかなかった。話がながくなったのも無理はない。

わが「じっかい」にこんなことがあろうか。

(一高在任S29・4・1～38・3・31)